

保井コノ資料の整理に携わって

松田久子

保井コノ関係資料が保井和子氏（保井コノの姪）から寄贈されたのは、1981年の「お茶の水女子大学の歴史と女性科学者の歩み」展からしばらく経た時であったと聞いている。私は、長年、湯浅年子資料の整理に時間をかけ、目録を2冊刊行することに従事していたので、保井資料の本格的な整理作業に取りかかったのは2003年の7月頃からであった。限られた時間であるが、保井コノ資料の整理について少し記しておく。

学術論文関係では、1905年、保井が女高師研究科に在籍時に最初の論文をまとめてから、1957年までの間に、ほとんど毎年研究論文を発表している。1916年アメリカ留学から帰国後、1919年東京女子高等師範学校の教授となり、日常の校務や講義が終わるとすぐ東京大学植物学教室へかけつけて、恩師藤井教授の講義の手伝い、実験指導を行い、それから自分の研究を続けた。1929年からは、さらに国際細胞学雑誌『キトログア』の発刊が加わり、さぞかし多忙な毎日であったと思われる。

研究実験資料関係では、米国留学で新しい石炭の研究方法を体得し、帰国してから日本の炭坑で資料採取をして書いた炭層柱状図が何枚も残っていた。植物学研究に関する資料は、写真、スケッチ、長期にわたる観察ノートや色つきの花の図版などもあったが、失われたものも多いと思われる。保井の指導のもとに作られた学生のレポートがあったが、専門的にきちんと仕上げられていた。その他、顕微鏡、写真機などの実験器具や、プレパラート、試薬瓶などもあった。

退職後1968年頃までキトログアの編集部から「会計報告のチェックを」という依頼の手紙が送られている。保井は、キトログアに関わった多くの生物学の研究者から信頼され尊敬されていたのだろう。女子高等師範学校の公的資料、戦後の新制大学が生まれるまでの資料などの整理は、これからも継続する必要があると思う。

保井の論文以外の資料は少ない。その中で、随筆「初の女性博士となるまで」、博士号取得時の新聞報道、顕彰に関わる記事、藤井健次郎教授や教え子にあたる湯浅年子博士との交流を示す文章は貴重なものである。定年後の1958年から66年まで毎年1回のアメリカ留学の同窓会といえるRadcliffe Club of Japan Meetingとの連絡書簡も残っていた。

最後に、保井コノと50年もの間生活を共にし、その生涯を支えた妹の保井マサ氏についてふれたい。マサ氏は、日本画を本格的に学び、美しい花の絵を描き、外国へ行かれる研究者達に贈った。残された家計のメモから晩年の慎ましい生活が察せられる。姉の偉業とともに妹の生涯も語り継がれるべきであろう。保井先生の残された資料を整理する仕事にあたり、女性が差別されていた時代に学問研究に一途に進まれ、高度な研究成果を残されたことを尊く思う。